



## アートシティの魅力満開へ —瀬戸内国際芸術祭2010に寄せて—



高松市長

大西 秀人

(助)香川経済研究所が記念すべき設立30周年を迎えられたこと、誠におめでとうございます。そして、ちょうど今年、高松市の市制施行120周年にも当たります。

このような記念すべき年をお祝いし、高松の魅力を内外に大きく発信する一大国際文化イベント「瀬戸内国際芸術祭2010」が、いよいよ7月19日の海の日から開催されます。会場となる高松港周辺や備讃瀬戸に浮かぶ7つの島々では準備も大詰めを迎え、わくわくした期待感がいやが上にも高まっています。

先ごろ、ある若者向け雑誌の「魅力ある地方都市ランキング50」という特集<sup>(注1)</sup>で、高松市が第7位という上位にランクインしていました。ちなみに、第1位は福岡市で、以下、京都市、札幌市、奈良市、那覇市、金沢市ときて高松市が第7位です。私自身が少し驚いたくらいの高い評価でしたが、その寸評を見てみると、「アートシティが定着。うどんツアーとのギャップで幅広い層を獲得。」とありました。アートと讃岐うどんという2つのアイテムが高松市の魅力を高め、評価を引き上げていたのです。

高松がアートシティとして評価されるようになってきた基礎は、「デザイン知事」とも呼ばれた金子正則元知事の功績にある、といっても過言ではないでしょう。日本の近代庁舎建築のシンボリック的存在でもある丹下健三氏の香川県庁舎（現東館）をはじめ、同じく丹下氏の県立（舟形）体育館、大江宏氏の県文化会館や芦原義信氏の（旧）県立図書館などユニークな建築群を手がけ、更には高松近郊に「芸術村」を作ることを構想し、流政之氏を支援し、イサム・ノグチ氏を牟礼に招聘したのも金子元知事です。今から約半世紀前の経済成長最優先の時代にあって、金子元知事は、「政治も芸術も、究極の目的は同じ、いずれも人の心を豊かにするためにささげられるべきものだ。つまり、政治と文化は根本的に同じもので、文化的な裏付けのない政治や経済は本物ではない」と言い切っています<sup>(注2)</sup>。今日のアートシティの基盤を築いていただいた、その類まれなる洞察力、先見の明に感謝したいと思います。

「瀬戸内国際芸術祭2010」の開催で、高松のアートシティとしての魅力は、備讃瀬戸の島々をも巻き込み、更に飛躍的に拡大し、満開となることでしょう。市民の皆さんとともにそれを大いに楽しみながら、しっかりと未来へ繋いでいきたいと思っています。

(注1) BRUTUS 2010年3月15日号

(注2) 「高志低居」金子正則先生顕彰会 編